



かなであん

〒249-0002 逗子市山の根1-7-24
Tel : 046-871-1863 Fax : 046-872-3485

布施は喜捨

来たる東京オリンピックでもっとも金メダルに近いと期待されていた水泳の池江璃花子選手が白血病であることを自ら公表しました。これからの彼女は病床で自分の体と心に向き合い、絶望と希望を、積んでは崩し、積んでは崩し、しながら厳しい治療の日々を送っていかねばならないでしょう。

まだ18歳という有名アスリートの癌公表が、血液癌治療に有効な「骨髄移植」への関心に繋がり、提供者登録が増えていると伝えられています。

* * *

骨髄、臓器、献血の提供者は「ドナー」と呼ばれています。ドナーは寄付（ドネーション）をする人のことで、私も今回の治療で何度か輸血のお世話になりました。

私に施された血液は、知らないどなたかが、どんな人に役立つのかなどと考えもせず提供して下さった血液です。血液には有効期間がありますから、せっかくの提供も期間が過ぎれば、研究に回されたり捨てるしかない場合もあります。それでも喜んで提供して下さった、献血もまさに布施です。

布施は差し上げたからにはどう使われてもよいと、喜んで捨てる「喜捨（きしゃ）」が本来の姿であり「ドナー」のあり方なのです。

一方で「ふるさと納税」にも考えさせられます。「ふるさと」というロマンチックな言葉で誘うあやふやな政策は、「得するネット情報」に成り下がっています。本来自分に縁のある「ふるさと」に少しでも役立ちたいという思いで成され、それに対して地場商品をお礼にお返しするというお互いであるべきだったものが、それを利用して得をしようという状況を生んでしまっているのです。どこで誤った方向に行ってしまったのでしょうか。対価を求めさせる方向に向かわせてしまったのは、深くものごとを思索せず、心地よい言葉でまやかす今の思想教育にも原因があるのではないのでしょうか。

一昔前まで脈々と伝えられてきた施しの思いは、人間同士はもちろんのこと、生きとし生けるすべてのものと自然環境や恵みや心を分かち合って共々に生かされている、そういう思いを日々の暮らしの中で自然に生まれる環境がありました。皆がそうする、そうしてきたことによって、他への喜んでさせていたかくという喜捨が育まれていたのです。せずにはいられないという布施は、人間が人として生かされるため思いから生まれる、世界共通の大切な行為なのです。

* * *

現代社会では、布施といえば、法事やお葬儀でお経をあげて

もらう「対価」として「支払う」ものという価値観になってしまっています。これは、宗教が教え示さなければならない生き方から真逆な考え方です。宗教が一番してはいけないのは「世間のニーズへの迎合」です。しかし、それは宗教家だけで伝えられるものではありません。

日々の暮らしにあるものは、みんなが生かさせていただくため、大切な人が生かさせていただくため、しいては自分自身が生かさせていただいているために恵まれてあるもので、必要以上に握りしめるものではないという気づきがなければ、喜んでさせていただく心は生まれません。

施しが真に布施（寄付）となるには、施した方が「させていただいて嬉しかった」という感謝の気持ちをもって施すことです。困っている人に手を貸す、道や席を譲る、優しい言葉をかける、温和な表情で接するなど、布施は数限りなくあります。

そして布施は与えることばかりではありません。欲しい欲しい、人より豊かでありたいという貪りの心、貪欲を抑えるのが最も大切な布施だと説かれています。これこそ誰にでもできる布施です。小欲知足、貪らず足るを知る心で生きることです。それが一番のドナーではないでしょうか。 合掌

奏庵法座

日時
2月26日(火)
午前11時より

「真宗宗歌」
正信偈
法話
ご文章拝読
「恩徳讃」
～*～
おとき

庵の柱、住職が入院不在で
過ごした冬はひととき寒さが
身に沁みました。皆さまには
いかがお過ごしでしょうか。

いつもならとくに満開が
過ぎていたはずの玄関先の老
木の紅梅が、例年より花付き
は少ないもののやっと咲いて
くれ、小さな花が放つ体以上
の香りに、季節を乗り越えた
強さを感じます。今月も住職
の退院は叶いませんでしたが、
みなさまが集って和やかな法
座を勤めてほしいとの伝言で
す。どうぞお参り下さい。お
待ちしています。

仏教が生んだ日本語
【大事だいじ】

「大事な物」「大事な用件」
「大事な人」と日常口にする。
「大事」または「一大事」とは、
もとは、さまざまの仏が人々を
救済するために世に出現するこ
とをいう。我々の立場からは、
出現した仏に出遇うこと、仏道
に志すこと、修行をして悟りを
開くこと、さらに自らの行き方
を発見すること、何が自分にと
って一番大切なことであるかを見
出すこと、自分の一生をそれに
かけてよいということに出遇う
こと、これが本来の大事であ
る。

時代劇の表現の一つに、「御
家の一大事」がある。当然これ
は武家の基準に添った大事であ
る。何よりも大切なことを大事
とよぶから、単なる家臣の失態
や事故などはこれに該当しない。
「主家が存続するか否か」これ
が武士に置ける大事の認識であ
る。大きな飢餓や戦乱の続いた
室町時代、本願寺蓮如は、安心
して生きるために真実の法に出
遇うこと、そしてわが身ひとつ
のゆきどころを見定めることが
「一大事」であると、喝破した。
自分にとって何よりも大切なこ
と、自らの心身と引き換えにで
きることのみを「大事」とよび
たいものである。

(大谷大学編参考)



ちっとして
寝ていらっしやいと
子供にでもいふがごとくに
医者はいふ日かな

石川啄木

「憂う」という言葉がある。
長く生きれば次々増える前途へ
の心配だ。人生において何の憂
いもなく過ごせる期間はどのく
らいだろう。自分や家族が可も
なく不可もなく暮らし、平穩で
大きな心配のない期間は数年だ
ろう。■カナダ時代「先生は今
何が一番怖いか」と聞かれ「日
本の親が弱ること」だと応えた
ことを思い出す。金もなく英語
も上達せずとも、子供もそこそ
こに育ちのんびり穏やかだった。
ただ離れて暮らす親に何かあれ
ば…、という心配が一番の憂い
だったのだ。■恐怖や不安は本
能的なもので、赤ちゃんもっ
ている。今私がいる病棟は半分
が小児病棟で、処置室に移動す
る際に可愛いベッドに乗せら
れたら不安や恐怖で泣くのだ。
その姿を見るとやるせないが、
その子供たちにまだ憂いはない。
しかし見守る親たちには、我が
子の命が失われていくかもしれ
ない、障害を背負うかもしれな
い、それでも生きなければなら
ないなど憂いが渦巻いているこ
とだろう。■白血病を公表した
池江璃花子選手に始められてい
る化学治療。私も経験した抗
がん剤治療は、病魔との闘いとい
うより、過酷な治療を完全に委
ねるしかない自分との闘いだ
たと振り返る。アスリートとし
ての高い壁を乗り越え成果を上
げてきた彼女は、「神様は乗り
越えられない試練は与えられな
い」とツイートしている。ご家
族は乗り越える試練には、生も
死も含まれていることを知るか
らこそ悲しみ、まず生きてい
てほしいと願われておられるこ
とだろうと察する。今の彼女自身
の心と体いっばいの不安が憂い
に変わるとき、それが回復して
いく兆しだと思う。(病室にて)

